

巻頭言

悠悠閑閑

山田章吾

私どもの東北大学医学部放射線医学教室の初代古賀良彦教授は昭和8年(1933年)3月に九州大学から赴任してこられ、昭和17年(1942年)1月に教授に就任された。九州大学から続けてこられた古賀教授のお仕事は間接撮影法の研究であったが、東北大学では専ら断層撮影法の研究をなされた。昭和13年高橋信次先生入局、また昭和16年松川明先生が入局された。古賀教授の発想のもと、高橋信次先生により完成をみた回転横断撮影法は後にCTトモグラフィーに発展する。また古賀教授は松川明先生と共にサーカストモグラフィーを完成させた。私どもの教室はこのように断層撮影と切っても切れない関係にある。ハードを手作りしていた時代であった。CTが世に出てから、超音波、MR等、断層機器の進歩は急速で、もはや放射線科医によるハードの開発は不可能に近い。入局勧誘会においても、胸を張って、「物理は出来なくともよろしい」と言える始末である(?)。画像の作製、読影、処理を含めてソフトの時代に入ってきたのではないかと思う。それにしても古賀教授のあの卓越した発想はどこからきたのであろうか。夕方5時ともなると、碁を打ちだして、医局員と毎晩遅くまで悠然とお酒を飲んでおられたと聞く。本質を見抜く力、せこせこしない余裕といったものからきたのであろうか。古賀教授は昭和42年6月に逝去された。昭和50年入局の私は残念ながら古賀教授にお目にかかることは出来なかった。大学院重点化の時代の流れの中で私どもの教室も昨年から診断部門と治療部門とに分かれた。私は治療部門を担当させていただいているが、治療領域では高橋信次先生が開発された原体照射法、またそれを発展させた定位放射線治療が現在脚光を浴びており、これからますます発展する分野である。原体照射法は回転横断撮影法からきており、ここでも先輩の偉業をひしひしと感じる昨今である。ある時間、ある空間で最善を尽くされた先輩に続きたいものである。

(東北大学大学院医学系研究科医科学専攻 病態制御学講座 量子治療分野)